

高知市 秦泉寺廃寺発掘調査

第1次調査概報



高知市教育委員会

昭和50年 1975

目 次

1 本廃寺の名称と位置	1
2 遺跡の環境	2
3 調査の契機と今次の調査	5
4 発掘の状況	6
5 遺 物	9
6 結 び	15

高知市秦泉寺廃寺発堀調査報告

第一次調査概報

岡本健児・広田典夫

1 本廃寺の名称と位置

秦泉寺廃寺の秦泉寺は寺名でなく地名である。この廃寺は從来は秦泉寺カネツキ堂と呼ばれていた。昭和15年に県立図書館の長岡康、高知師範の山本淳両氏によって、カネツキ堂と呼ばれる地点が一部調査され、蓮花文鏡瓦、巴文鏡瓦、重孤文字瓦などが発見され、奈良時代の廃寺のあとであることが判明した。この奈良時代の廃寺が秦泉寺にあるので、この地名をとつて秦泉寺廃寺と呼ばれている。

本廃寺は高知市のほぼ中央部から土佐山に通ずる幹線道路（主要県道高知本山線）が北に走っている。この幹線道路で市街地を通り久万川を越えると、愛宕神社のある愛宕山の麓に来る。西側に秦小学校をみて約500mいくと、秦農園前の四辻で分岐点にいたる。この四辻を約100m直進すると西側にややひらけた水田地帯がみられる。この水田地帯に秦泉寺廃寺跡がある。本廃寺は久万川の支流金谷川と西側の迎水寺山にはさまれた扇状台地の先端部に造営されたもので、中秦泉寺鍛冶屋ヶ内瀬通りで、原野141-1（市有地）を中心とする田畠および人家に含まれる地点が、本寺の寺域と推定される。

2 遺跡の環境 (図) -1

本廃寺跡の存在する附近の文化的環境について考えてみると、まず本廃寺を中心とする秦地区には、七世紀代の古墳としては、次のように12基がみられる。

- 秦泉寺東谷古墳
- 秦泉寺愛宕山古墳群（4基）
- 秦泉寺吉弘古墳
- 秦泉寺開古墳
- 秦泉寺迎水寺古墳
- 秦泉寺日の岡古墳
- 秦泉寺淋谷古墳
- 秦泉寺宇津野古墳（2基）

そして最近西秦泉寺に奈良末から平安初期とみられる窯跡が発見されている。そのうえ本廃寺の瓦を焼いた窯跡もあるはずであるがいまだ発見されていない。まず秦泉寺という小さな地域に土佐としては、割合多くの古墳が発見され、古墳の大部分が七世紀前半に造られたものである。このことは六世紀末ごろからこの地域を中心に開発が進められ、生産性の向上に伴なって、豪族の出見もうかがうことができる。そのことは又寺院を造営することのできる富と権力をもつ基盤がこの頃からはぐくまれていたことを推察することができる。又これらの古墳を造営しらる人々の集落遺跡については、いまだつまびらかではないが、ここで「和名抄」にててくる郷について考えてみると、もちろん古墳時代の集落をあつかうのに「和名抄」の集落である平安時代の郷を使用するのは時代的に差異はあるけれども、「和名抄」の郷のうちのあるものは、七世紀前半のこの時期にその集落の前身としての姿をあらわしていたとみてよいのではないだろうか。秦泉寺を中心とする土佐郡の土佐郷について筆者の一人岡本は次のように書いている。

「土佐郷については古来二説が存在する。一説は安養寺禾磨の説であって『土佐幽考』に掲げる所の現在の高知市一宮説である。そして今一説は、吉田東伍博士の著である『大日本地名辞書』による布師田説である。

この両説は土佐郡の神戸郷をどこにするかによって異なってくるのである。

本書では神戸郷を安養寺禾磨の考え方と同様に高知市神田をあてている。ただ本書は神田だけでなく鴨田もこのなかに入れなければなるまい。その理由づけとして、安養寺禾磨も『土佐幽考』のなかでふれているが、次の『続日本紀』にある記事も一つのものである。

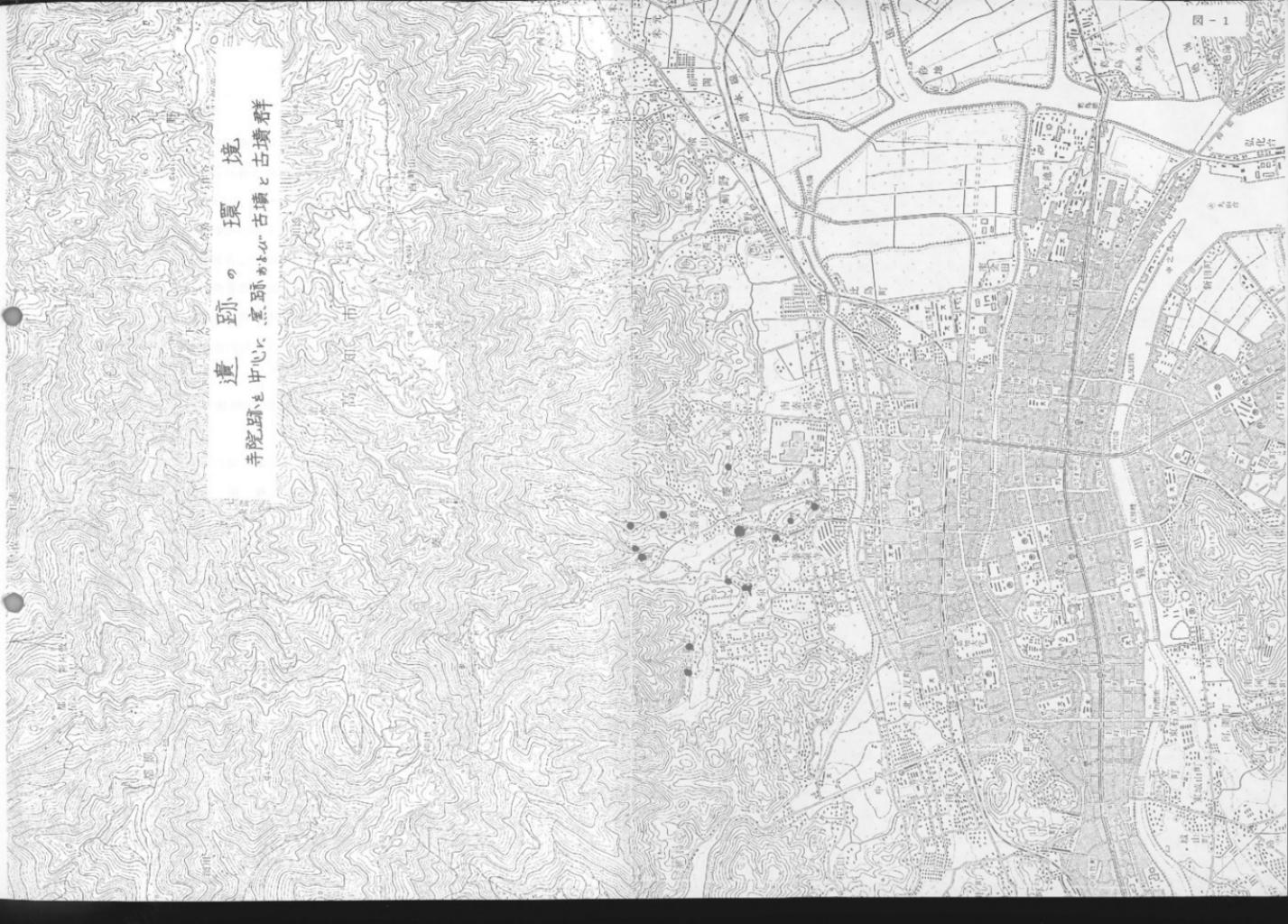
考謙天皇神護景雲二年十一月戊子土佐郡人神依田公名代等四十一人賜姓
賀茂

神依田は即ち神田であり、また賀茂氏の田であるので鴨田なのであろう。よって神戸郷は今の高知市神田と鴨田と考えてよいだろう。

さて神戸郷が今述べた地域であるので、それに対して土佐郷は今の高知市布師田、それに一宮、そして秦泉寺（旧村名を秦と言っている）がそれであろう。」

この土佐郡は土佐の中心であり、かかる環境の地に本寺院が営まれ、今日廢寺として残っている。

遠跡の環境
寺院跡を中心とする古跡と古墳群



3 調査の契機と今次の調査

今次の緊急調査は中秦泉寺が高知市の市街地に近く、宅地造成が進んでいる地域であり、寺域を確認し保存のための試作を行なう必要があったため、本年度高知市が県の援助をえて、第一次発掘調査を行なったものである。調査は昭和50年10月28日から11月1日の内4日間行なわれた。今次の調査は地区公民館、土地所有者、土地耕作者、高知県教委、高知市教委、学識経験者による秦泉寺廃寺発掘調査団をつくり、会則も定めている。会長には永野公民館長があり、岡本、広田が学識経験者として発掘指導と報告書を書くことになった。発掘調査団は次のとおりである。なお○は発掘参加者である。

秦泉寺廃寺発掘調査団

団長 永野 益樹

副 大八木 久米一、○岡本 幹雄

永野 高夫 和田 静雄 中島 佐

永野 延寿 ○中山 隆美 岩崎 正吉

森本 裕 永野 拓 ○岡村 久吉

島崎 賢二 由原 敏幸

相談役 川口 光子(市会議員) 水谷 流水(秦支所長)

和田 宜玄(城北農協長) 山中 太郎(秦小校長)

事務局長 横井 戊辰(市教委社教課長) 事務局員(市教委)

県教育委員会

発掘参加者

米田 穂吉 斎藤 溪龜知 横田 安亮

森 常治 三谷 千恵 山中 伊佐尾

4 発堀の状況(図) - 2.3

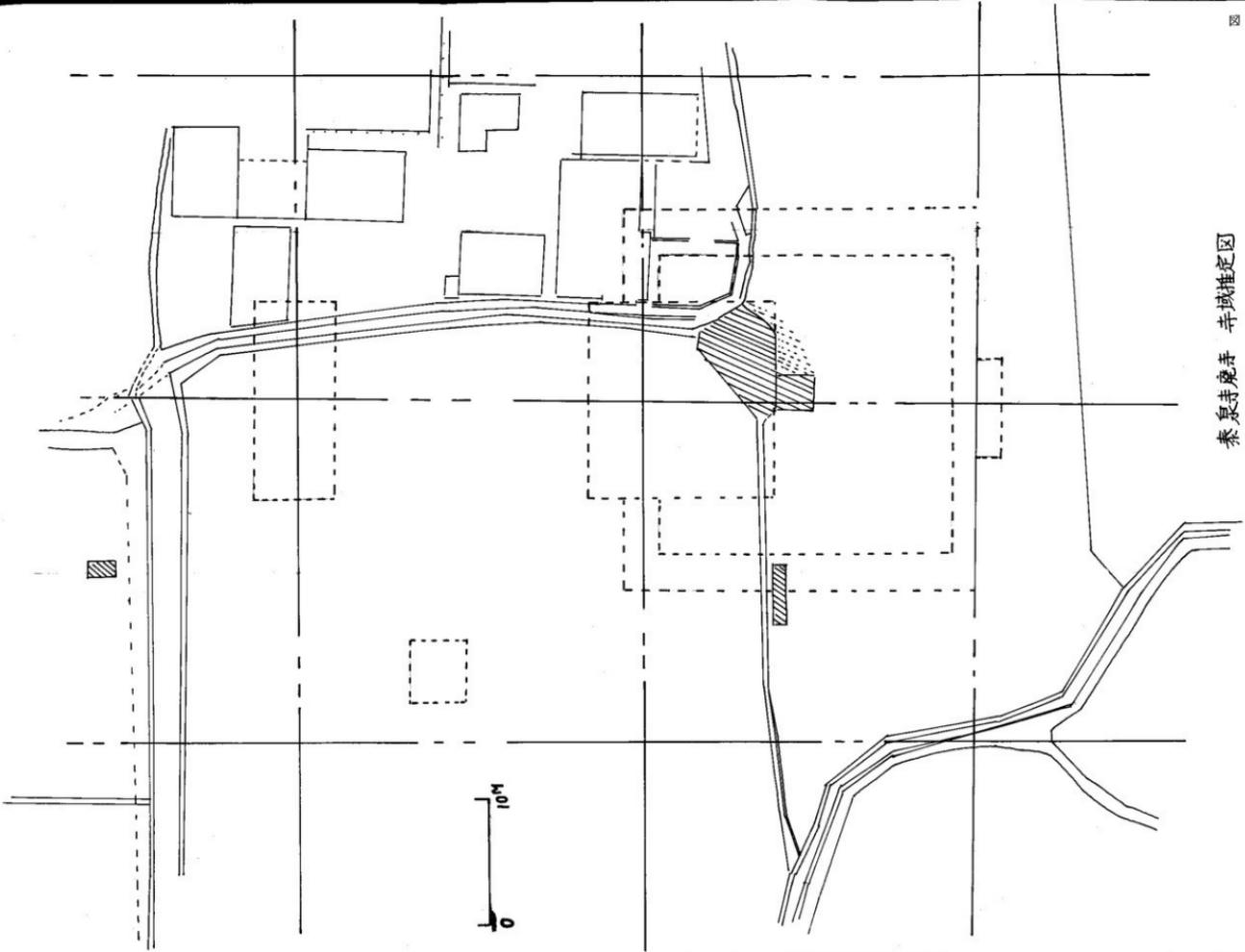
寺域の金堂近くと推定される市所有地の $8\text{m} \times 5\text{m}$ と、その前面の水田 $10\text{m} \times 5\text{m}$ それに寺域の中央北のビニールハウス内に $1\text{m} \times 2\text{m}$ のトレンチを 3 本入れた。

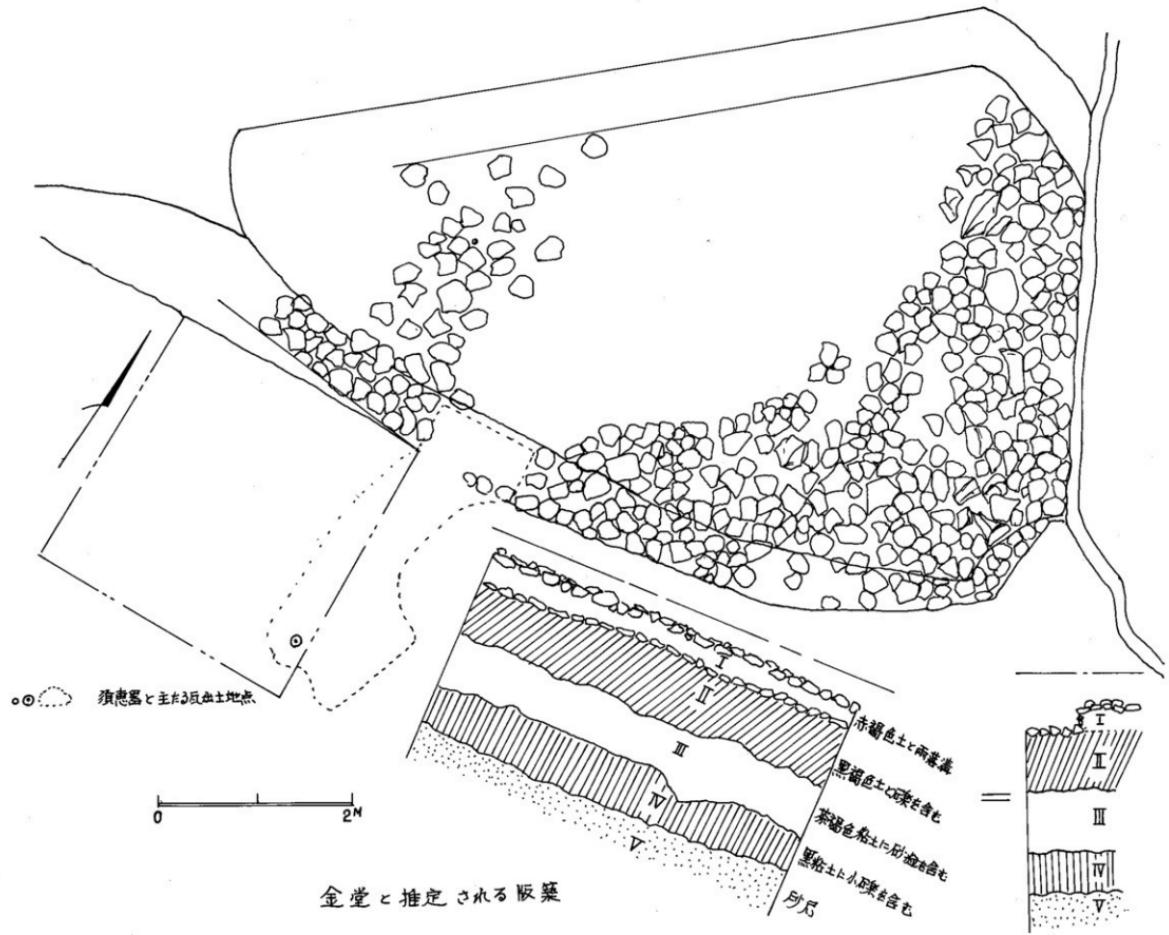
ビニールハウス内の各トレンチ層位は、表土層（黒地粘土）、第二層（赤色湿地）、第三層（灰色粘土）、第四層は（砂礫）になっており、第三層に瓦の小破片と土師器片が含まれている。そして第1区の南の方が第三層が深く北に進むほど、第三層は浅くなり、それとともに瓦片も含まなくなる。

金堂近くと推定される市有地は、表土下 50cm より一面に栗石および割石が敷きつめられ、その高さ 30cm その南面に雨落溝とみられるものが見出された。前面の水田には石階とみられる $3\text{m} \times 3\text{m}$ の版築がみられた。以上の金堂跡と推定される版築と石階とみられる版築は、最下層の砂層から上部に四層にわけて築かれている。その層位は第一層（黄褐色土に礫を混入）、第二層（黒褐色土に礫を混入）、第三層（茶褐色粘土に砂礫を混入）、第四層（黒粘土と小礫を混入）で、第一層から第四層までの厚さ 79cm である。

金堂近くと推定された版築上部の栗石および割石の上から瓦の小破片が少量発見されたが、調査前からこの場所にあった直径 40cm のえの木の下には版築上部の栗石などはみられなかった。地元の人の話しによると、前述した昭和15年に長岡康、山本淳両氏が調査したおり、これらの石を取り除き、調査後之の木の苗を植え、今日にいたっていたのである。特に多量の瓦が出土したのは、版築前面で石階とみられる版築上と東側に集中して発見された。そしてこれらの瓦はすべて二次焼成がみられる。なお今次の調査ではできなかつたが、これら瓦出土地の前面にも多量の瓦が埋没している。

秦良寺発達 幸城推定図





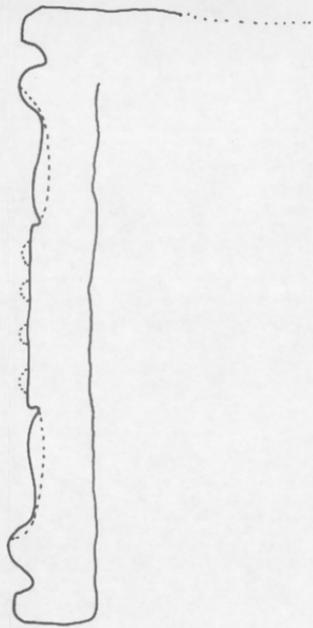
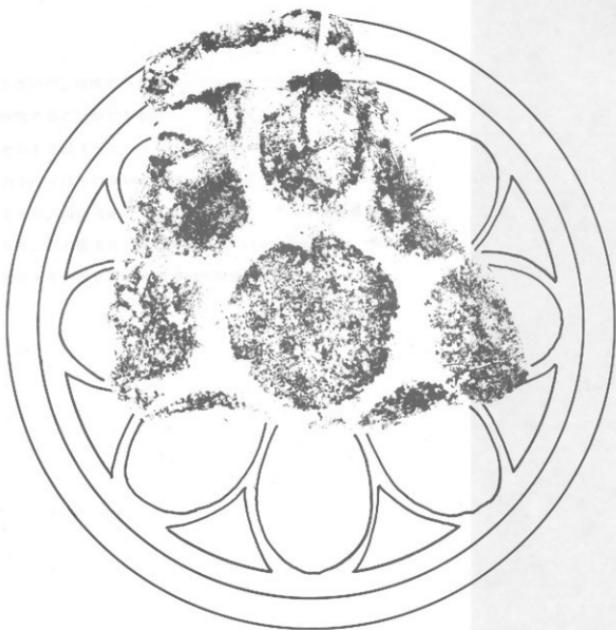
5 遺 物

本発掘によって得た遺物は瓦、須恵器、土師器で、なかでも瓦はその数400点をこし、本寺院の建立年代を想定するうえで有力な示唆を与えるものである。

A 瓦 類

イ. 単弁蓮花文鏡瓦(図)-4

本遺跡出土の唯一つの鏡瓦であるが、破片であり風化がひどいので、その全様を知ることができないのは残念であるが、復原直徑15.4cm中房の径4.6cm蓮子は磨滅してその数を知ることができない。蓮弁8葉で先端はまるい。周縁はつまびらかでないが素縁であろう。



0 5CM

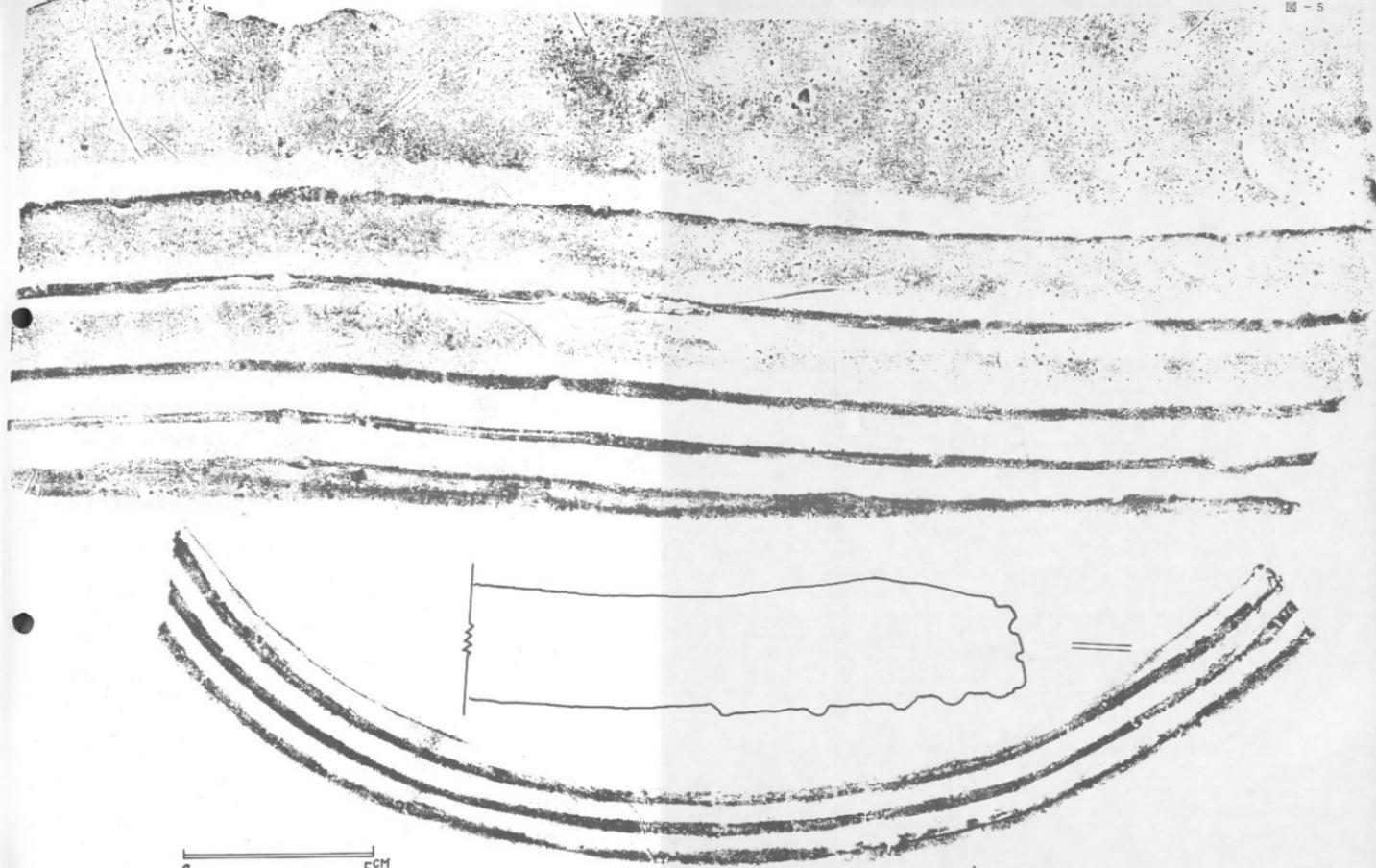
盤 瓦

口字瓦

完全なものは1個もないが、ほぼ完形をうかがうことのできるものもある。大別して二種類に分類することができる。

A 重弧文字瓦その1(図)-5

三重の重弧文で肉が厚くほりの深いものと、肉が薄くほりのやや浅いものとにわけることができる。頸が発達している。これにぞくする宇瓦は裏側に三つの凸帯がつくられ、その後方に一段の段をつくっている。巾は32cm、長さ42cm～43cm前後である。厚さは3cm～3.5cm程度である。



字瓦 そのI

B 重弧文字瓦その2 (図) - 6

三重の重弧文であるが、一見すれば二重の重弧文のようにみえる。肉厚くほりも深いが一方の頸は良く発達しているが、瓦上部にあたる頸は薄い。裏面に二段の段がみられ、瓦全体の厚みは薄い。

ハ. 平瓦 (女瓦)

平瓦はその数多く完形品も數個みられる。凸面は繩目の印目文、格子目文、縞杉文などがみられ、凹面は布目が施されている。この布目文も布目の大小、波形をなすものそして直交するものなどがみられる。平瓦の大きさはほぼ同大で巾32cm、長さ45cm程度で、そのそりは両端で6.5cmほどである。厚さは多少の差はみられるが3cm前後のものが多い。なおこれら平瓦のなかには降棟の端に使用された切取りのみられるものも含まれている。

ニ. 丸瓦 (男瓦)

丸瓦の出土数は少なく完形のものもない。その形からみて今回出土のものはすべて行基葺瓦である。



0 5cm

宇瓦その2

ホ. 須恵器

完形の高杯と壺の胴部の小破片である。高杯は瓦と共に出土したものであるが、二次的焼成のため、非常にもろくなっている。小形で高さ7cm、壺部の径14cm、脚部は大きく裾を広げるもので、本寺院で祭祀用としてもちいられたものであろう。

ヘ. 土師器

瓦と同時期とみられる土師器の小破片が数個出土している。

ト. その他

金堂跡とみられる市有地の表土中より、寛永通宝1と、石仏の頭部が発見された。

6 結 び

今次の調査は寺域を確認するための調査であったが、発掘調査をする範囲が限定され、日数も短期日であり、寺域全体を明確にするまでにはいたらなかった。しかし市所有地内に金堂跡とみられる版築が発見され、その南面の水田に、それにつづくと思われる石階の版築が発見された。これらの発見によって次のような寺域を推測することができそうである。

調査された石階とみられる版築の巾が3mあり、当時の唐尺ではほぼ10尺にあたる。その中央から市所有地内の金堂跡と推定される版築の東端までを計測すると8.9mであった。この8.9mは唐尺では30尺にあたる。これに廻廊をつなぐとすれば、石階版築の中央部から東廻廊の中央までの長さが45尺ぐらいであろうと推測される。なお本廃寺出土の瓦は奈良中期の瓦である。そのことは本廃寺の建立年代を奈良時代と考えることができる。奈良時代に建立された寺院であれば、その建立寺院の様式は東大寺様式であると考えるべきであろう。

東大寺様式の寺院であれば、金堂の中央から廻廊の中央までの長さの8倍

が、寺域と定められている。これを当廃寺にあてはめれば45尺の8倍即ち360尺となる。360尺は1町である。この1町を一辺とする正方形が当時の寺域となる。

さて当時建立された寺院には、全国に国分寺があり、それには僧寺と尼寺があるが、國によっては尼寺が建立されなかったと思われる國（県）もある。土佐の場合国分僧寺は明確であるが、国分尼寺はいまだはっきりせず、建立されなかったと云う説が強い。建立問題はさておき、この土佐の国分寺はその寺域が東西500尺、南北450尺となっているが、この土佐の国分寺の寺域は、全国的にみても大きい方にはいらない。むしろ全国的には寺域としては小さい方である。土佐一国の寺院として建立された寺院の大きさと、本廃寺の寺域とを比較すれば、前者の規模がより大きいものであったことは、云うまでもなかろう。それにしても土佐のような僻遠の地で、一町四方の寺域をもつ寺院の建立を可能にしたのは、相当の権力と富をもつ豪族であったことは云うまでもなかろう。2の遺跡の環境の項でも述べた如く、この豪族こそ土佐の中心である土佐郡を統治した郡衛の郡司ではなかろうか。すなはち本廃寺は郡衛に關係ある寺院であったと考えれば、規模からみても一町四方で寺域としてはほぼ適當でなかろうか。

なお本調査によって推定した伽藍配置からすれば、金堂跡と考えた版築の南約90尺の場所に中門を考えることができるが、これは第二次調査によつて、市所有地の南側の水田を調査することで明確にしなければならない問題である。

次に発掘された瓦の出土地点は、市所有地の金堂跡と推定した版築の上部からも発見されたが、主たる場所は、金堂跡の版築前面で右階の版築の切れた東側の落込みじうになった場所に集中して発見された。その発見された瓦は、本廃寺の築造当時のものとみられる奈良時代中期のものが中心で、奈良

後期に近いものも含まれている。そしてこれらすべての瓦が二次的に焼けたものであり、茶褐色および黒色になり、多量の木炭片と共に発見された。このことは築造された本寺院が焼失したことをものがたるものであり、この出土瓦が、築造当時の瓦であることは、最初につくられた本寺院は焼失し、その後は当初のような寺院は再建されなかつたであろう。このように一定の場所に瓦が集中し発見され、その両側にも、多量に瓦が埋没していることから本廟寺の焼失時には東南方向にくずれおちていったことを、うかがうことができる。

本概報の文責

広田典夫

